

# 幼児は自然の中で育ち合う

——幼児教育に対する両親の意識調査から——

西本美節

文部省が昭和四十七年に「幼稚園教育振興十カ年計画」を実施し始めてから昨年度で、ちょうど後半期に入りました。この間に幼稚園教育はどの程度振興し、幼児を持つ両親の希望はどれだけかなえられるようになったでしょうか。

公・私立の幼稚園が新設されたり、学級が増設されたり、公・私立幼稚園の設置運営費・施設費及び設備費に国庫助成が行なわれるようになり、都道府県からは私立幼稚園運営費補助や、保護者に対する就園奨励費補助が行なわれるようになりました。その結果、確かに就園率は増大し、昭和五〇年になると、幼稚園には、公・私立を含めて六三・五%、保育所には二四・六%、合計八八・一%の幼児が保育を受けています。就園率が高くなったことは好ましいことですし、親の意識が、幼児教育に向けられるよ

うになったことも確かです。けれども、施設の増加、就園率の向上を喜ぶだけでなく、幼児教育に対する両親の意識の内容を知る必要があります。

## 両親の育った社会と現状

第一に乱塾時代と言われる現在、親として子どもにすべきことをしているでしょうか。高度成長時代に学童期・青年期を過ごした戦後派の親が、インスタント加工に慣らされ、集団教育の美名に隠れて、子どもの教育を委託加工的に、幼稚園や保育所に任せて就園させているかも知れません。

第二に、六四%の家庭が子ども二人であり、一人子も多く、四人以上となればわずか二%しかないような少数精鋭主義では、文

字・数教育などを中心とした、保育を逸脱した知的早教育を求め  
る傾向がみられます。

第三に、教育の機会均等の恩恵を受けて成長し、高校卒業以上の  
学歴を持つ両親が六九%にもなり、そのうち大学卒業の父親が  
三〇%余り、母親も、短大・大学卒業が二〇%になり、専門職の  
ための職業学校卒業が両親共に二五%にもなっていることからみ  
ると、高学歴に伴い両親の共働きの理由が単に経済的な困難から  
だけとは言い難く、専門的職業の意識の高揚を持つ者がふえてい  
るようです。

第四には、女性の退職後の職場復帰が難しく、育児休暇もあま  
り認められていない社会情勢からみ、結婚・妊娠・出産・育児  
など白眼視される中でも、仕事を継続せざるを得ない状況にあり  
ます。

第五には、生活様式の変化、マンション・カー・冷暖房・乾燥  
機・電子レンジなどデラックス化されると、経済的要求もますます  
高められる結果となり、物質的要求と共に、生活様式が人々と  
同様になるか、物質的には到底人並になれないとなれば、その要  
求は、少数の子どもに向けられ、教育投資という型が生まれま  
す。

いずれにしろ、自分で手を下すことより先に、安易に他人の手

を借りたり、マスコミに振り回され、すべての生活基準が、マス  
コミの情報のみ頼り、自己主張はするが、自主性に欠ける依存  
的な親も多く見受けられます。給食や、インスタント食品で成長した  
現代の親にとって、高学歴化は必ずしも、高い人格や教養をもた  
らすとは限らず、単なる教育年数の延長としかみられません。し  
かし、自分で子どもを産み、育てることにより、新しい目が開か  
れます。このようないろいろな背景のもとにエゴイズムをむき出  
した両親の教育を行なうこと、幼児教育の本来のあり方を示すこ  
となど、保育者の負う責任は計り知れないものがあります。

この際、私たちは保育の原点に帰り、現代社会の要求、両親の  
意識や、現状をしっかりとつかみ、未来社会を見通して、幼児教育  
の真理を求めなければなりません。

#### 両親の意識調査の実施

今回、幼児教育に対する両親の意識の一端を知るために、父親  
二一九人、母親三八六人の協力を得て面接し、就園・未就園の理  
由、就園前の施設及び保育の見学の有無、教育施設の行事への関  
心、施設及び保育に対する満足度、将来の教育施設像などについ  
て意見を聞きました。

それと同時に、幼児にとって、施設教育よりも多くの影響を受

ける家庭教育の面も見逃すことができないので、家庭教育の必要性、子どもをしかったり、ほめたりしながらのしつけ方、期待する幼児像、文字や数教育・けいこ事などへの関心、子どもの仕事及び家業との関連や、親子関係、子どもの将来の人間像などについても話し合いました。

両親の意識調査は、アンケートや質問紙法によれば結果の集計が容易であり、分析や比較研究もしやすいのですが、アンケート調査では回答が建て前論に陥りやすく、両親の有りのままの気持や本心を知ることがむずかしいようです。したがって、きれいな事ではない本音を吐いてもらうために、ここでは面接法を用いました。(そのため調査結果の処理等が多少雑然としている点はお許し頂きたい)また、調査者の暗示や、誘導を避けるよう注意しましたので、比較的有りのままの姿で、両親の本心を知ることができたと思います。

この調査の対象は、就園率の高い京阪神地区の両親であり、就園状況は、三歳児四八・四%、四歳児八六%、五歳児九五・九%、六歳児一〇〇%で、全体的にみれば、八六・八%となりま  
す。三・四歳児は保育所が多く、五歳児になると、幼稚園児がふえています。三歳児の五一・六%は未就園ですが、小さいので手元において育てたいと両親は希望しています。

### 両親の意識調査の結果

高就園率を示しているこの地区の両親は、どんな園へ就園させるかについては、第1表Aのように意識が低く、その理由は、第1表Bのように無関心が半数で、残りの半数は「兄弟と同じ園にやりたい」など、人まかせになっています。就園の直接の動機は、通園に便利で近いからということ。その理由は、第2表

就園前の見学 (第1表A)

	見学した	見学したい	その他
父親	18.0%	60.7%	21.3%
母親	24.3	61.1	14.6

見学しない理由 (第1表B)

分類	項目	父親	母親
情報	妻にまかす	16.2%	0%
	人からきく	10.8	9.6
既知	兄弟が就園	8.1	21.1
	親と同じ	0.9	0.9
行政	先生を知る	0	2.9
	公立だから	0	3.3
行政	小学校へ直結	0	1.9
	決っている	4.5	6.2
	無関心	59.5	54.1

就 園 理 由 (第 2 表)

分類	項 目	父 親 %	母 親 %
家庭の事情	経済的、共働き		
	家庭の不健康、弟妹に手数	14.2	20.2
	兄弟が園に行く、しつけを家庭で		
社会事情	評判がよい		
	知人のすすめ	6.1	4.6
	世間の通例		
保育年限	1年がよい		
	2年がよい	6.6	3.6
	3年がよい		
保育事情	専門家にまかせる		
	設備・環境がよい 長時間保育、給食がある、人数が 少い	6.1	7.6
通園事情	スクールバスがある、決っている		
	近い、近所の友達がい く 友達がない、子供の希望	33.8	32.8
幼児の事情	社会性 (規律・一人子・集団生活 友人・協調性・道徳など)		
	性 (自主的・活発・甘えた 格 (明朗・性格形成など)	32.7	31.2
	能 (勉強・知識 力 (体力など)		

のように多岐にわたっています。母親の就業による共働きも、多少増える傾向にあります。

教育施設の行事については、自分の子どもや近所の子どもがわかるので必要だとし、母親だけでなく、その時を父親も楽しみにしています。教育施設への積極的不満はあまりみられませんが、今のままでも、良い園と思っている順位を第3表で見ま

しょう。

一位は「のびのび遊べる」園で、「教師と子どもの人間関係がよい」ことを好ましく思っているが、父親は、「しつけの厳しさ」を、母親は「設備がよく、楽しい園」を良いとしています。表には、三十項目余りの中から五位までしかあげませんでした。その他の項目としては、教師の人格・教育態度・長時間保育のほか、幼児への配慮として、集団性を養う・才能を伸ばす・体力づ

良い園の順位 (第3表)

順位	父	親	順位	母	親
1	のびのび遊べる	10.6%	1	のびのび遊べる	14.8%
	設備がよい	10.6			
2	人間関係よい	10.2	2	人間関係よい	13.0
3	敞しいしつけ	7.8	3	設備がよい	7.8
4	自然が多く広い	7.3	4	楽しい園	7.2
5	専門職の自覚	6.9	5	自然が多く広い	6.5
				専門職の自覚	6.5
				人格者(教師)	6.5

くりなどありましたが、各家庭や親の受け止め方は、さまざまです。将来の幼児教育施設像についても、種々多くの希望や、期待がみられます。その内容は第4表のように、施設に関するものが多く、制度への要求もみられます。順位は、第4表Bに示す通り、

「人間性の尊重」

が第一位で、幼児期はいろいろなことを教えられることよりも、子どもなりに人間性を豊かに育ててほしいと願っており、一家の経済をになう父親は保育料の無料化や、よい設備など物質的な環境を、母親は一園・一クラスの規模を小さくし、幼児四

〇人に一人の教師では行き届きにくいので、一学級の幼児数を減らし教師を増員し、教師の人格・教養など質の向上による人的環境の改善を望んでいます。

母親は父親よりも、日常の保育や教師に直接触れる機会が多いからだろうと思われる。一園に二〇〇人も、三〇〇人もの園児数では、幼児自身が、大勢の集団の中で威圧感を感じ、伸び伸びと個性を発揮できず、母親どうしも、二年間同じ園にいながら、一言も言葉を交すこともできず、親しみも持てないという不満も聞かれました。

順位に多少の違いはあるにしても、どの幼稚園も、保育所も同じ遊具ばかりでなく、もつと自然を取り入れ、木蔭や芝生・草原を入れ、既製の遊具にとらわれず、平地ばかりよりも、自然な起伏がある方が遊び場に向いているのではないか、教師の数が多く、一園の幼児数が少なければ広々とした戸外遊びが十分できるように思う、という積極的な意見もありました。

これらの背景には、住宅の高層化、住居の狭まり、遊び場の不足、屋外の危険の増加など、子どもにとっての悪条件があり、せめて保育施設の中で、子どもどうしの接触を深め、毎日自然に親しむ機会を与えられ、欲を言えば、二年間保育の義務化と、公私立の別なく、保育料の無料化が望ましいが、宗教教育の自由、一

将来の幼児教育施設像 (第4表A)

分類	項目	父親 %	母親 %
教師	年配者 (若すぎる・経験者)	7.6	10.1
	質の向上 (人格・教養) 男子教師		
施設	自然を多く広々と (遊具を減す) 設備のよい 長時間保育 教師の増員 (規模小さく 20人~15人に1人)	33.6	31.9
制度	無料化 公立増加 公・私の区別なく 誰でも入園できる 義務化 (2年)	27.7	20.1
保育方法	しつけを親と協力 人間性の尊重 音楽・絵・英語教育 小学校との一貫性	15.6	22.4
現状のままでもよい		6.3	6.5
その他	その他、関係ない 老人福祉より優先など	9.2	9.0

将来像の順位 (第4表B)

順位	父親	順位	母親
1	人間性の尊重 13.0%	1	人間性の尊重 16.6%
2	無料化 11.3	2	教師の増員 12.0
3	設備がよい 10.5	3	自然が多く 8.4
4	自然が多く広い 8.8	4	無料化 7.3
5	教師の増員 8.0	5	設備がよい 6.9
6	長時間保育 6.3	6	教師の質向上 5.7
7	義務化 (2年) 5.9	7	義務化 (2年) 5.4

つしか就園する所がないとか、地域で決められた施設に通うのでなく、家庭の事情や子どもの性質によって、二・三園の中から選んで就園できるようになればよいなどの意見もあり、地域によっては、現在就園していても、必ずしも適当な施設に恵まれていない人々のいることもうかがえます。また、教師に若すぎる人が多く、特に男児には女性だけでは優しすぎ、思考・行動上に、もっとダイナミックな広い視野や、科学性をもった若手の男性教師の

必要性を求める声も聞かれました。

家庭でも教育が必要と認めている両親は九〇・五％ですが、「不要」「わからない」と答えた者が約一〇％いる点も考えなければなりません。その教育内容の中で最も力を注いでいる面は、「日常生活などのしつけ」で二〇・七％、次いで「他人との交際」が一五％です。わずか四％ですが、「知識教育」もすべきと考えています。

しつけ (第5表)

分類	項目	父親	母親
性格	素直, はっきり言う, けじめ たくまし, いたわり, 自主的 理性的平等, 明るく, 忍耐 正直, よい人柄など	24.9	34.7
対人関係	行儀, 礼儀 挨拶などことば 約束・きまりを守る 善悪の判断, 迷惑をかけない 友人と仲よくなど	55.0	45.0
自立	自立, 食事 安全など	13.9	13.9
その他 (親孝行・女らしく)			2.4
自由にする		6.2	4.0

「しつけ」の内容は第5表に示したように、父親は、礼儀・あいさつ・善悪の判断など社会人としてのエチケットに、母親は人に迷惑をかけない・善悪の判断・言葉づかいなど、やや自省的消極的でルールに反しないような配慮をしています。

しつけを始める時期については、生後すぐからという母親が二四・九%、一歳からは父親が二〇・四%、三歳からは父親が四六・三%、母親が二六・七%というように、父親は三歳頃が最も適当とし、母親はその時に応じて生後から三歳までの間に、各年

齢に見合ったしつけを徐々に行なうのがよいとされています。母子関係の方が父子間よりも密度が高く、成長にしたがった型になるようです。

子どもから将来の進路を相談された場合に、両親の半数は子どもの意見を尊重するとしながらも、父親は、自分の経験を土台にして子どもの進路を示すことによつて、父子関係の成立をみせています。家業の継承については、父親は本人の意思次第としてはありますが、できればあとを継いでもらいたいという心願がみられ、これも自分の経験からの表現でしょう。

このように、日常生活面は母親が、将来の見通しについては父親がそれぞれ役割分担し、幼児期では母親の暖かい接触と、父親の楽しい遊び仲間としての人間関係がみられます。

子どもがどんな時に、しかられたり、ほめられたりして、両親からしつけを受けているかは、第6表に示したとおりです。これによると、父親はおとなの言いつけに従うようにしつけ、母親は自分のことを自分でやろうとし、どんなささいなことでも最後までやり遂げるように励ましながらしつけようと心掛けています。子どものけんかについては父親の方が比較的見守る態度を示しますが、母親がけんかをがまんできないのは、子どもと身近に接触しているときが多いためでしょう。

叱る・褒める事柄 (第6表)

分類	叱る			褒める		
	項目	父親	母親	項目	父親	母親
態度	言うことをきかぬ 約束を守らないなど	44.5	38.9	言うことをきく 約束を守る	20.1	15.9
行為	片付けない (ちらかす) いたずら, 迷惑をかける	3.8 1.3	7.1 9.4	片付ける 手伝う	5.7 18.1	6.5 14.3
対人関係	けんか	13.4	16.1	仲良くする	9.8	12.4
自立	食事・着衣できない	10.5	7.3	自分のことを自分でする	11.3	16.6
対話	悪い言葉	2.5	4.2	上手に話す	8.2	5.3
仕事	横着 (我まま)	13.9	11.7	最後までやりとげる	11.9	18.2
その他	泣く, おもらし, ふざけ	3.8	3.4	おもいやり	7.7	7.8

幼児像 (第7表)

分類	項目	父親	母親
性格	素直, 意志が強い, たくましい ハキハキ言うことができる 豊かさ, やさしさ(いたわり) 広い心, 明るい, のびのび 忍耐など	65.1	68.3
	対人関係	礼儀正しい, 道徳的 迷惑をかけない, 好かれるなど	10.1
	身体が丈夫で元気な	18.1	11.9
その他	頭のいい 子供らしい, 女らしい	6.7	5.7

文字・数教育については、父親の五四・一%、母親の五〇・三%が教えています。気持ちの上では父親の方が、母親よりもやや積極的な態度で、教える時期も父親は三歳児を主にしています。母親は三歳頃から五歳までの間に教えればよいと、おうようです。学齢期に近づくとも母親の方が内心あせりながらも、子どもへの働きかけはあまりみられません。

けいこ事は母親の方が熱心ですが、している子は男児では六歳でも三四・八%と低く、女児では四歳で四七・八%、六歳では七三・二%となり、はっきり性差がみられます。数少ないがその種



人 間 像 (第8表)

分類	項 目	父 親	母 親
性 格	素直, 責任感, まじめ 意見をはっきり言う 豊かさ, 創造性, 忍耐	27.5	37.8
対 人 関 係	立派な人間, 道徳的, 迷惑を かけない スケールの大きな人間 信頼される (好かれる) 人の 役割に立つ 常識ある, 親孝行など	26.1	31.3
知 的	頭のいい・才能・個性 医師・弁護士・科学者・警官 看護婦・教師・保母	20.8	14.5
人 生 観	平 凡 強く生きる	25.6	14.5
そ の 他			4.6

類は、男児の場合、習字・数・英語など学習塾、女兒の七〇％は  
バレエ・ピアノなど音楽関係です。

両親の望ましい幼児像については、第7表に示したとおり、す  
なおでやさしく、明るいじょうぶな身体で元気な子どもであり、  
人に好かれ、女の子は女らしく、男の子は意志が強く、ハキハキ  
と物事が言えるようになることを望み、将来どんな人間に成人し  
たらよいかについては、第8表のように、性格・対人関係・知的  
水準・人生観などほぼ平均化した期待がみられ、特に父親は実社

会との接触からほとんどすべての面で円満であるような  
人間像を、母親は性格・対人関係をやや重視し、身近な  
人間どうしについて考えるのは当然でしょう。豊かで、  
人に信頼され、才能や特技をもちながら、平凡でしかも  
強く生きるバランスのとれた人間像を描いています。

## 結 び

意識は決して低いとはいえませんが、施設教育につい  
ても、家庭教育についても、父親として、母親としての  
特色はほとんどなく、平均化した意見が随所に見られま  
した。教育に関心のある両親であるのに、「主人と話し合  
います」とか「家内がそう言いますから」などと、夫婦  
の相互信頼は好ましいことですが、どうも相互依存的な態度がみ  
られ、言葉づかひも、父親の方に母親より優しさといねいさが  
みられました。

最近の女性の男性化、男性の女性化的傾向がうかがわれ、画一  
的思考の中で、おとなしく育てられ、消極的な自主性の乏しさと  
いうか、個性の埋没が見られます。人と協調することは大切で  
すが、幼稚園・保育所という集団の中で、一人一人の個性が生き  
られることがもっと必要ではないでしょうか。

そのためにも、広々とした大自然の営みの中で、子どもどうしの接触によって自然に育ってくる自由な人間性の認め合いを、教師は静かに見守り、保育する高い人格と教養が大切です。

「教育問題に関する東京都の世論調査」にもあるように、「教師の質の向上」「大学における教員養成と現場研修」なども考えながら、親たちの意識の向上を図りつつ、情報過多の現代を生きる幼児たちが、協動的でありながら、自主的で、正しい選択力を持ち、多角的で柔軟な思考力と、判断力を備えられるように、幼児教育を幼児にふさわしく、あらゆる面で再検討する必要がありますが、しょう。

(神戸常盤短期大学)

二月に入ると、立春そして

て節分がすぐにやってきます。節分の夜には、豆をまきます。その豆まきに、こんな思い出があります。

二、三年前のこと、母が

豆まきの大豆を用意していませんでした。母が言うに

豆まき  
堀田冬子

は、おつかいに行つたけれど、大豆はもうすでに、みんな売れてしまつて無いというのです。

母がつけ加えて言うにはあなたたちは、もう大きいのだから、豆まきをしなくてもいいでしょうということ

とです。ところが、これに対して

意外にも強い不満を表わしたのは、私達姉弟ではなく、帰宅した父でした。

節分に豆まきをしないで過ぐすというのは、おかしい。豆ぐらいどこかで売っているだろうと言つて、自分で捜しに行きました。

帰ってくると、豆は豆でも、虎豆を携えています。

これしかなかったというところで、父は声をはり上げ、虎豆をまきました。

しかし父曰く、「鬼のパンツは虎の皮だな。虎豆で鬼を退散できるのかな…」